はじめに

前主任の林文孝先生が2013年度後期より，来年度前期まで研究休暇を取得されるのに伴い，一年間，代役を務めることとなった．その間，どうにか大過なく過ごせたのは，関係教員各位，事務スタッフの皆さんに心より感謝したい．

まず，本年度の本専攻の行事を振り返ってみよう．

本年度の研究交流会は2013年10月21日（月）に開催され，3名の報告があった．詳細については，本号にも資料が掲載されているので，そちらをご覧いただきたい．

2013年10月11日（金）には，池袋キャンパス12号館第3・4会議室にて，ヤン・ゲプハルト氏（チェコ科学アカデミー歴史研究所）による講演会「ボヘミア・モラヴィア保護領におけるチェコ文学と映画」が本専攻および日本スラヴ学研究会との共催で開催され，阿部が司会・通訳をつとめた．ローラン・ビネ『HHhH』の邦訳刊行によって，同時代への関心が高まっていたということもあり，多数の聴衆の参加のもと，ひとつのケーススタディに留まらない，複合的なアプローチの重要性について議論がなされた．

そして，年度末には本紀要『境界を越えて』第14号が刊行される。だが，「論文」，「研究ノート」がそれぞれ一本しか掲載されていない現状はやや寂しいものであるというのが正直な印象である．投稿資格を有している方々には（とりわけ院生諸君には），みずからの思考のかけらを結晶にすべく，積極的に投稿していただきたい．

さて，2013年度3月をもって，千石英世教授，彦坂尚嘉特任教授が定年退職を迎える．以下，簡単におふたりを紹介しよう．

千石英世先生は，東京教育大学でアメリカ文学を修められたのち，1975年より東京都立大学で助手を務められ，その後，専任講師として1977年に明治大学に着任され，1980年からは同助教授として教鞭を執られている．翌1981年に東京都立大学で助教授として戻られたのち，1992年，本学文学部英米文学科に教授として着任されている．そして世紀を跨いだ2006年4月，改組・新設された文学部文学科文芸・思想専修に移籍されている．同専修では，従来の各国文学の研究の枠組みに留まらない，クリエイテイヴ・ライティングなど，様々な表現の可能性を探求する場として「文芸」という表現を前面に押し出し，本学に新しい風をもたらされた．同専修と密接な関係にある本専攻においても，長年にわたって指導にあたっていただいたほか，前期課程において創作物の提出を修士論文と同等にみなすという，「文芸」研究・創作に励む環境を整備されたのも，千石先生のご尽力の賜物である．

本学の研究者情報に関するページでは，研究分野・キーワードとして「文学，楽しさ，静謐さ，表現力，感受性」を挙げられているように，「文学」の本質である「楽しさ」を多様に追求されたその姿から刺激を受けた者が，教員，院生，学生を問わず，数多くいたことはあらためて指摘するまでもないだろう．ここにあらためて御礼を記すとともに，その精神を忘れずに継承していきたいと思っている．

次いで，多方面で活躍するアーティストとして知られる彦坂尚嘉先生が，本専攻の特任教授として着任されたのは，2009年春のことであった．美術・建築を中心としたユニークな授業を次々と展開され，多くの院生に刺激を与えていただいた．くしくも，本学在籍中に3.11を経験されたわけだが，それ以降も，南相馬の仮設住宅の建設に従事されたり，被災者の和歌を集めた『3.11万葉集・復活の塔』(2012）を刊行されるなど，特定の領域に留まらない活動を続けられている．

今後も，新しい環境でお二人が活躍される姿は，我々にとっても心強い励みとなるはずである．お二人のご活躍を心よりお祈りする（なお，第13号には千石英世先生による文章が，本号には彦坂先生の文章がそれぞれ掲載されているので，あわせてお目通しいただきたい）．

春が訪れ，去りゆく人もいれば，あらたに足を踏みいれる人もいる．目の前に広がる新たな風景がどのようなものになるのかは検討もつかない．だが，自分の足場をしっかりと固めて，前に進んでいきたいと思っている．

2014年1月
立教比較文明学会会長
立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻主任
阿部　賢一